第1回国際漫画賞 受賞者日本招へい事業より

日本のマンガ文化に触れた8日間

海外でマンガ文化の普及活動に貢献するマンガ家を顕彰する第1回国際漫画賞の授賞式が7月2日に飯倉公館で行なわれた。ジャパンファウンデーションは受賞者を日本に招へいし、日本のマンガ家との懇談、出版社等への表敬訪問などを行なった。8日にわたる日本滞在の模様を同行したスタッフが報告する。

中島裕介（なかしまゆうすけ）
ジャパンファウンデーション
芸術交流部映像出版課主任

李志清氏が描きプレゼントしてくれた筆者のイラスト

憧れのマンガ家、井上雄彦氏（中央）を囲む第1回国際漫画賞受賞者たち。右から、李志清、BEN、KAI、マドレーヌ・ロスカの各氏

プロのマンガ家としての自覚

今回の第1回国際漫画賞の受賞者の招へいは、マンガ家としてのキャリアも来日経験もまったく異なる4人の受賞者が、単に訪問先を巡り質疑応答する場となっただけでなく、受賞者同士が互いに刺激し合う契機にもなった。

受賞者全員が集まった7月2日からの滞在期間中、ずっとそれぞれの描く手順やペンの使い方、描くスピードや彩色の方法、果てはプロとしての働き方やアシスタントの使い方についてまで、毎日情報交換をしていた。

彼らは本当に絵を描くのが好きで、特に李志清さんやBENさんはレストランに入ってから食事が出るまでの間、あるいは電車が目的地に着くまでの間など、ほんの少しでも暇があれば、窓の外の風景や他の客の様子をスケッチブックやレストランのメニューに描きつけていた。

しかし、彼らもただ絵について話し、絵が描くのが好きなだけではない。講談社と小学館の2つの出版社を訪問して意見交換を行なった際には、自分たちの作品が日本で発表される可能性があるのか、日本で発表されるには作品をどのように改善すべきであるのかなど、プロのマンガ家として積極的にアドバイスを聞き、セルフプロデュースしていく。編集者の方々からは、4人の画力の高さを評価する声が多数聞かれた。

国際漫画賞を受けた李さんは、マンガ家としてのキャリアが25年以上にわたり、受賞前から日本でもすでに単行本が刊行され、「夕刊フジ」に連載を持っている点からも、「日本でも十分な知名度がある」と言っても過言ではない。その彼がこの招へい期間中も常に大きなバッグを持ち歩き、人に会うたびにA3版のポートフォリオを見せ、さらに自分の存在をしっかりと覚えてもらえるよう、彼らに名刺を渡し、絵入りの色紙や単行本にサインを加えてプレゼントしていた。

これに対して、奨励賞受賞者の3人は当初、李さんの様子をやや物怖じして見ていたが、日が経つにつれて名刺や自分の単行本、ポストカード集などを持ち歩き、自己アピールをするようになっていった。特にオーストラリアに住んでいて、アメリカの出版社から発行されたデビュー作が受賞作となったマドレーヌ・ロスカさんにとっては、マンガ関係者と会い、積極的にセルフ

川崎市市民ミュージアムでは、『機動戦士ガンダム』のキャラクターデザインで知られるマンガ家・安彦良和氏の原画展示を熱心に見学

プロデュースを行なう場が今までほとんどなかったのである。そんな彼女がプロのマンガ家として活動していく上で必要なことを学び取っていく姿、それに加えてお互いが刺激を与え合っている様子は、随行する私にとっても喜ばしく感じられた。

日本のマンガのファンとして

4人はそれぞれに関心のある分野こそ異なるものの、みな、日本のマンガやアニメのファンでもあった。李さんはマンガ家としてのキャリアも長く、すでに20回以上も来日していることもあり、日本の著名なマンガ家とも親しい。そんな彼が絵やマンガに関心を持ったのは、子どものころに耽読していた手塚治虫氏やちばてつや氏の作品がきっかけだった。宝塚市立手塚治虫記念館を訪問した際には目を輝かせながら一つひとつの展示を見ていた。その中でも手塚治虫氏が少年時代に描いた蝶のスケッチや昆虫目録の細かさに驚き、「手塚氏は子どものころから何事にも熱中して、徹底的に観察する性格だったから、偉大なマンガ家になれたのだろう。そういう真剣さや熱意を見習いたい」と話す。

受賞者は4人とも好きなマンガ家に手塚治虫氏を挙げていたが、今回マンガの制作現場を訪ねた井上雄彦氏（『SLAM DUNK』『バガボンド』『リアル』などで知られる）も、4人が共通して名前を挙げていた一人である。なかでもマレーシアからやってきたBENさんは、井上氏と面会できるかどうかまったく未定であった段階から、その面会を来日の最優先目的に挙げていたほど熱望していた。

KAIさんは家族が皆マンガ好きで、マンガを通じて日本語を勉強し始めたという。日本のイラスト誌や同人誌にも寄稿していて、日本滞在中には友人からKAIさんの受賞を祝う寄せ書きを贈られていた。京都精華大学を訪問

国際漫画賞とは

「国際漫画賞」（International MANGA Award）は2007年5月に創設され、外務大臣やジャパンファウンデーション理事長などからなる第1回国際漫画賞実行委員会が主催。第１回の今回、世界26カ国および地域より146作品の応募があった。作家出身国・地域別では多い順に、中国（香港を含む）24、英15、独14、マレーシア11、仏10、台湾9、韓国、スペイン各8、ベトナム7、フィリピン6、米、インドネシア各5などである。審査の結果、19作品（12カ国）が選考対象として入賞。国際漫画賞および奨励賞の受賞者は次の通り。この4人はジャパンファウンデーションにより、授賞式に合わせて招へいされ、マンガ家との懇談および関連団体の訪問などを行なった。

国際漫画賞（最優秀作品）

李志清　Lee Chi Ching
中国（香港）
『孫子兵法』（Sun Zi's Tactics）

奨励賞（その他の優秀な3作品）

KAI
中国（香港）
『十五二十』（1520）

BEN
マレーシア
『Le. Gardenie』

Madeleine Rosca
オーストラリア
『Hollow Fields』

招へいスケジュール（2007年７月）

7月1日	来日 〈東京泊〉
2日	●講談社訪問（編集者との懇談、編集部見学） ●国際漫画賞授賞式 〈東京泊〉
3日	●小学館訪問（編集者との懇談、編集部見学） ●スタジオぴえろ訪問 〈東京泊〉
4日	●川崎市市民ミュージアム訪問（関係者との懇談、館内見学）〈東京泊〉
5日	京都へ移動 ●京都精華大学訪問（関係者との懇談、授業見学）〈京都泊〉
6日	●京都国際マンガミュージアム訪問（学芸員・研究者との懇談、施設見学） ●宝塚市手塚治虫記念館 〈京都泊〉
7日	●京都観光 〈京都泊〉
8日	東京へ移動 ●秋葉原見学 〈東京泊〉
9日	●ジブリ美術館訪問 ●井上雄彦氏（仕事場見学）〈東京泊〉
10日	離日

受賞者たちは自らの作品を持って出版社を訪ね、プロの雑誌編集者からマンガの描き方、見せ方などについてアドバイスを受けた

して竹宮惠子教授と話す機会を得たときも、最も喜んでいたのは少女マンガに詳しいＫＡＩさんだったように思う。

ロスカさんはマンガだけでなく日本のアニメにも詳しく、アニメ制作会社であるスタジオぴえろを訪問した際、それまでの疲れがすべて吹き飛んだかのような笑顔で劇場版『ＮＡＲＵＴＯ』や『BLEACH』のポスターを眺めていた。アニメの中でも特に『新世紀エヴァンゲリオン』が好きで、ポスターやフィギュアを見つけるたびに嬉しそうに、しかし真剣な眼差しでデジタルカメラに収める姿が印象的だった。

「めくり」と「執筆スピード」の違い

招へい期間中に訪れた2つの出版社の編集者や京都精華大学の先生方から共通して指摘されたのは、マンガの「めくり」に対する意識と、執筆スピードの2点であった。

まず、ここでいう「めくり」とは2つの意味を持っている。一つはページをめくる方向について。日本語が右上から左下へ読み進める縦書き（右縦書き）であることに由来して、日本のマンガでも文字やコマを右上から左下方向に向かって読む。そのため、日本のマンガは（この『をちこち』と同様に）ページを左から右へめくっていく「右めくり」で構成されている。

これに対して、欧米諸語が左上から右下へ読み進める横書き（左横書き）であるため、欧米の多くのマンガは右から左へめくる「左めくり」となっている。もし今回の受賞作を日本で出版するならば、左めくりで構成されているＢＥＮさんの作品『Le. Gardenie』については、今のままの左めくりとするか、左右を反転させて右めくりに変えるなど、なんらかの処置をしなければならない。言語の違いに端を発するものではあるが、右めくり・左めくりの違いは、日本の読者にとっての読みやすさと作家の意図のどちらかを犠牲にしなくてはならない、簡単には翻訳できない差異なのである。

もう一つの「めくり」は、読者に強い印象を与えるページやコマの構成を言う。つまり、読者は作品を読み進めるたびにページをめくるのだが、通常、見開き全体でお話が終わってしまえば切りがよいこともあり、読者はページをめくる動作そのものにストレスを感じる。そこで、見開き全体の最後のコマ（左下のコマ）では次のページの内容を読者に期待させるように、あるシーンの途中を描き、ページをめくったあとの最初のコマ（右上のコマ）でそのシーンの中で最も印象付けたいコマを挿入する。

そうすることで読者はページをめくる際にストレスを感じることなく、期待感を持って読み進めることができるのである。例えば、ロスカさんの『Hollow Fields』の場合でも、めくりが意識された個所と、めくりが意識されていないと思われる個所が混在しているとの指摘があった。

次に「執筆スピード」は各国の出版業界の違いが出ていると言えよう。つまり、日本ではマンガ雑誌に作品を連載し、一定程度の分量に達して初めて単行本になることが多い。これに対し、海外ではマンガ雑誌がまだ少なく、マ

京都国際マンガミュージアムでは駄菓子を片手に紙芝居を楽しむ。左からKAIさん、李志清さん

ンガ家が単行本をまるごと描き下ろすことが多く、毎週発行されるマンガ雑誌に掲載される作品のページ数も日本の週刊誌と比べて少ない。そのため、日本の週刊誌に連載を持っているマンガ家は1週間で20ページ以上を描かなくてはならないが、日本の連載ペースは海外のマンガ家にとって驚異的なまでに速く感じられることだろう。

将来の夢の実現に向けて

受賞者の出身地では、第1回国際漫画賞に関する報道が特に大きく取り上げられた。そんななか、受賞者の4人は帰国後、受賞したことの重大さを改めて認識している。

香港では日本のマンガブームはピークを過ぎてしまい、最近ではマンガを読む人も描く人も少しずつ減りつつあるそうだ。今回の受賞が、2人の受賞者を輩出した香港でマンガへの関心を高めるきっかけになれば嬉しい、とKAIさんは話していた。

BENさんは今後、マンガ家としての活動と並行して、編集者としてマレーシアでマンガ雑誌を創刊する。彼は「今回の招へいを通じて、自分のキャリアに対する考え方が変わった。私がいろんなマンガから影響を受けたように、私のマンガも他の誰かに影響を与えうるんだ、という自信と誇りを持ちたい。そしていつか、ただのComic Artistではなく、勤勉なMangakaになりたい」のだという。

最後に、7月5日に京都精華大学を訪問したあと、竹宮惠子教授が受賞作一つひとつに寄せてくださったコメントのから、一節を引用して筆を置きたい。

「マンガは常に、その作品を発表する国とその言語に則しています。できるだけ自然に、その土地のマンガ言語となって根づくように、これからも頑張ってください」

なお、今回の招へいにあたり、訪問各所にはお忙しい中、大変温かく迎えていただきました。各位の多大なご協力により出版社や大学、マンガやアニメの制作現場や美術館など、「マンガ」を多面的に考える上で非常に充実した招へいとなったことを、心より深く御礼を申し上げます。